

〈ICT教育：高等学校 英語〉

発信力強化に向けたパフォーマンス・テストとその評価の工夫

—Office 365 を活用したポートフォリオの実践を通して—

沖縄県立浦添高等学校 比嘉太一

I テーマ設定の理由

平成25年12月13日に公表された「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」において、文部科学省はグローバル化に対応した新たな英語教育の在り方として、「幅広い話題について抽象的な内容を理解でき、英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養うこと、授業を英語で行うとともに、言語活動を高度化（発表、討論、交渉等）すること」を提言した。さらに、高等学校学習指導要領（平成30年3月告示）において、これまで4技能（聞くこと、読むこと、話すこと、書くこと）と定めていた英語の技能を5つの領域（聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くこと）とし、「話すこと」の技能を2つの領域に細分化することが発表された。このように、自らの考えを英語で伝える発信力の強化は英語教育改革の主要な目的の一つである。

しかしながら、文部科学省が全国の高等学校3年生約6万人に対して行った「平成29年度英語教育改善のための英語力調査事業（高等学校）」において「英語の授業でスピーチやプレゼンテーションをしていたか」という質問に「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」と答えた生徒は合わせて36.9%にとどまっており、スピーチやプレゼンテーション等の発信力を評価するパフォーマンス・テストが十分に実施されていないことが考えられる。発信力を強化するためには授業内でコミュニケーション活動を実践するだけではなく、パフォーマンス・テストを実施するなど、継続的に生徒の発信力を評価する場面を設定するといった評価改善が必要不可欠であると考える。

自身、日々の授業において、文法指導を除いては英語で授業を行い、生徒が英語に触れる機会を増やすよう留意してきた。さらに、協働学習を取り入れ、英語を通じた発信力やコミュニケーション能力を高められるよう言語活動の設定に工夫をしてきた。しかし、教師の英語使用割合が高い一方、生徒が英語を使用する機会が少ない、発信力を評価する場面を設定できていないといった課題を抱えていた。そのため、昨年度に10年経験者研修の特定課題研究として「ICTを活用したパフォーマンス・テスト」を浦添高等学校3年生57名に対して、パワーポイントを利用したプレゼンテーション形式で実施した。研究実施前は英語の4技能の中で伸ばしたい力について64%の生徒が「話すこと」と答えていたが、12月時点では「話すこと」と答えた生徒の割合は90%に増加しており、パフォーマンス・テストの実施が発信力を高めたいという生徒の動機付けに繋がった。一方で、パフォーマンス・テストの実施に予想以上に時間を費やしてしまい、評価について生徒にフィードバックをする機会がなかったことや、生徒による自己評価や相互評価を行えなかつたことなど、パフォーマンス・テストの継続性や実施方法、評価方法等に課題が残った。

そこで、本研究ではOffice 365のOneNote Class Notebookを活用し、生徒一人ひとりが自己の課題や学んだ内容・評価等をまとめ、蓄積するポートフォリオ活動に継続性を持って取り組むこととした。さらに教師はOffice 365の機能を活用することで、パフォーマンス・テストやその評価を効果的かつ効率的に行うことができるようになり、生徒の発信力強化に繋がると考え、本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

- 1 生徒はポートフォリオ活動の実践において、Office 365を活用して学びの成果やパフォーマンス・テストの自己評価、教師からのフィードバック等を蓄積し、自らの学びを振り返ることで、課題解決に向けて主体的に取り組むことができるようになり、発信力を強化することができるだろう。

- 2 教師はパフォーマンス・テストにおいて、Office 365 の機能を活用することで、より効果的かつ効率的にテストやその評価を行えるようになるだろう。

II 研究内容

1 理論研究

(1) 英語力調査における実態

前述した「平成 29 年度英語教育改善のための英語力調査」は世界標準に基づいて日本の高校生全体の英語力を測定するため、図 1 の C E F R (Common European Framework of Reference for Languages: ヨーロッパ言語共通参考枠) を参照して測定されている。C E F R は外国語の学習・教授・評価のために 2001 年に欧洲評議会 (Council of Europe) で発表され、現在、欧洲域内外で使用されている。同調査は現行学習指導要領に基づき、対象者全員に 3 技能(「聞くこと」「読むこと」「書くこと」)試験を実施し、「話すこと」は 1 校あたり 1 クラスを対象に約 1 万人を調査しており、平成 27 年度との経年比較調査も実施している。

文部科学省は全ての技能において C E F R で A2 レベル以上の割合を 50% 以上とすることを目標としているが、「聞くこと (33.6%)」、「話すこと (12.9%)」、「読むこと (33.5%)」、「書くこと (19.7%)」と全ての技能で目標に達していない。特に、「話すこと」と「書くこと」の発信力に関わる技能は目標値の半分にも達していない。同調査において文部科学省は『『話すこと』の調査結果とのクロス集計を見ると、『話すこと』の得点が高い生徒ほど『英語でスピーチやプレゼンテーションをしていた』と回答する割合が高い』と報告している。スピーチやプレゼンテーションには「話す力」だけでなく、内容の構成を考え、原稿を自ら作成する「書く力」も求められる。そのため、先の英語力調査の実態と合わせて鑑みると、発信力強化のためには、スピーチやプレゼンテーション等を取り入れたパフォーマンス・テストの実施が有効であると考える。

(2) パフォーマンス・テストとその評価について

中央教育審議会は「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」の答申（以下「この答申」と言う）において、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組ませるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」と目的に応じて評価手段や方法を工夫する必要性を述べている。発信力の評価には、生徒の英語運用能力つまり、パフォーマンスを継続的に評価する継続性と、統一した規準に沿って行う信頼性が求められる。加えて、発信力はペーパーテストのように「正解か不正解か」といった二区分で採点することが難しいため、この答申で提言された評価法の中でも、様々な知識やスキル、運用能力等を多面的に評価することができるパフォーマンス・テストが評価の手段として有効であると考える。

熟練した 言語使用者	C2	聞いたり読んだりした、ほぼ全てのものを容易に理解することができる。いろいろな話し言葉や書き言葉から得た情報をまとめ、根拠も論点も一貫した方法で再構築できる。自然に、流暢かつ正確に自己表現ができる。
	C1	いろいろな種類の高度な内容のかなり長い文章を理解して、含意を把握できる。言葉を探しているという印象を与えずに、流暢に、また自然に自己表現ができる。社会生活を営むため、また学問上や職業上の目的で、言葉を柔軟かつ効果的に用いることができる。複雑な話題について明確で、しっかりととした構成の、詳細な文章を作ることができる。
自立した 言語使用者	B2	自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的な話題でも具体的な話題でも、複雑な文章の主要な内容を理解できる。母語話者はお互いに緊張しないで普通にやり取りができるくらい流暢かつ自然である。幅広い話題について、明確で詳細な文章を作ることができる。
	B1	仕事、学校、娯楽などで普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば、主要な点を理解できる。その言葉が話されている地域にいるときに起りそうな、たいていの事態に対処することができる。身近な話題や個人的に関心のある話題について、筋の通った簡単な文章を作ることができる。
基礎段階の 言語使用者	A2	ごく基本的な個人情報や家族情報、買い物、地元の地理、仕事など、直接的関係がある領域に関しては、文やよく使われる表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄について、単純で直接的な情報交換に応じることができる。
	A1	具体的な欲求を満足させるため、よく使われる日常の表現と基本的な言い回しは理解し、用いることができる。自分や他人を紹介することができ、住んでいるところや、誰と知り合いであるか、持ち物などの個人的情報について、質問をしたり、答えたりすることができる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助けが得られるならば、簡単なやり取りをすることができる。

図 1 C E F R の共通参考レベル

出典：ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッジ大学英語検定機構

そこで、パフォーマンス・テストの有効な評価手法として挙げられるのがループリック評価である。ループリックとは評価レベルと観点別の評価規準を、縦軸と横軸に書き込んだ絶対評価のための評価規準表である。ループリックを使用する利点として田中博之（2017）は「教師の直感でなく、明確な規準に基づいた評価を行えること」や「ループリックを開示し、子どもと教師が評価の観点や規準を共有できること」を挙げている。つまり、ループリックを用いることで教師が観点別に生徒の発信力を評価することができるだけでなく、生徒自身が自己評価や相互評価を統一した規準に沿って行うことも可能になる。自己評価によって生徒一人ひとりの「学びに向かう力」を養い、さらに、相互評価を協働的に行うことによって生徒間で「互いに学び合う関係」が形成され、生徒自ら主体的に発信力を伸ばす態度を育成できると考える。そのため、本研究では観点別のループリック表を作成し、教師からのフィードバックに加え、パフォーマンス・テストの自己評価、相互評価にも取り組む。

(3) ポートフォリオの取組について

現在、高大接続改革が極めて早いスピードで進んでおり、平成33年度の大学入学者選抜実施要項では、「主体性等」を評価するために調査書等提出書類の充実が図られ、調査書等の電子化の在り方についても現在検討が進んでいる。その対応として文部科学省は高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」の構築を進めている。生徒は自らの活動成果や学びを「JAPAN e-Portfolio」に記録し、それらの記録を振り返ることで「学びに向かう力」を育成し、蓄積した「学びのデータ」を利用して大学へ出願することができるようになる。

上述したような電子化されたポートフォリオはeポートフォリオと呼ばれるが、紙ベースで行われていたポートフォリオは1980年代後半にアメリカやイギリスで個人評価ツールとして取り入れられていた。森本康彦（2015）は「様々な学習記録を用いて学習者のパフォーマンスを多面的に評価する真正な評価(authentic assessment)が求められる際に、学習・評価のためのツールやエビデンスとして活用されるものがポートフォリオである」と定義している。さらに、ジョン・ズビザレタ（2009）は学習ポートフォリオの基本構成としてReflection(省察)、Collaboration・Mentoring(共同作業・メンターリング)、Documentation・Evidence(文書化・証拠資料)の三つを挙げており、その中でも特にReflectionを重要視している。ズビザレタによると生徒はポートフォリオ活動に継続的に取り組むことで、自らの課題や長所を省察し、改善に繋げることができる。また、ポートフォリオを共有することにより、生徒は他の生徒や教師と課題克服に向けた過程や成果について話し合い、更なる改善に繋げることができる。その結果、生徒が得た学びの成果を証拠資料としてポートフォリオに蓄積することで生徒の「学びのデータ」となる。この一連のサイクルは新学習指導要領で提言されている「主体的・対話的で深い学び」にも通ずるもので、発信力の強化にも活用できると考える。

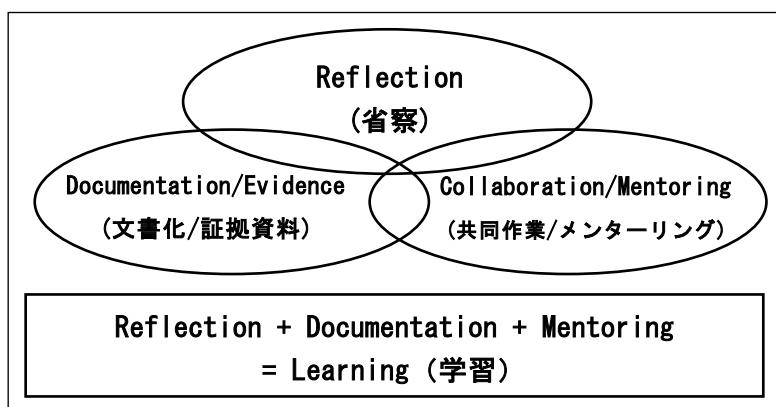


図2 ズビザレタの学習ポートフォリオモデル
土持ゲーリー法一（2010）を参考に作成

2 ICTの活用方法

(1) Office 365を活用したポートフォリオの取り組み

ポートフォリオ活動を継続的に行うために、本研究においてはOffice 365のアプリケーションの一つであるOneNote Class Notebook（以下Class Notebookと言う）を活用する。Class Notebookでは教師がクラスに一つのノートブックを作成することができ、生徒はそれぞれが用

途に応じて自らのノートブック内のフォルダを使い分けることができる。本研究では授業の振り返りやパフォーマンス・テストの動画データ、その評価をポートフォリオとして Class Notebook 上に蓄積する。その後、次のテストに向けてポートフォリオに蓄積したこれらの「学びのデータ」を基に、自らの課題を自己認識し、目標を自ら設定して課題解決に取り組むという学びの P D C A サイクルを確立したい。この取組を継続して行うことで生徒の発信力が強化できると考える。

(2) Office 365 を活用したパフォーマンス・テストの実施

先に述べたように、生徒の発信力を高めるためにはパフォーマンス・テストを効果的かつ継続的に実施することが必要である。しかし、私のこれまでの実践ではパフォーマンス・テストを行う際にその実施に多くの時間を割いてしまい、生徒にフィードバックを行えず、取組が継続的に行えないといった実施方法に関する課題や、評価が教師から生徒への一方向のみになってしまい自己評価や相互評価を行えなかった等の評価方法に関する課題があった。また、これまで発音指導を教師や ALT が行っており、全ての生徒の指導に一斉には対応できないという課題もあったが、本研究では Class Notebook の機能の一つであるイマーシブリーダー（文字読み上げ機能）を活用し、パフォーマンス・テストに向けて各自で練習に取り組むこととした。

パフォーマンス・テストの内容としては Lesson に関連するトピックを 1 分間スピーチとして行い、スピーチの様子を動画データとして Class Notebook 内のフォルダに保存し、そのデータを基に自己評価、相互評価、教師からの評価を行うこととした。

表 1 本研究で使用した Office 365 アプリケーション一覧と活用方法

Office 365 のアプリケーション名	活用方法
OneDrive（クラウド機能）	授業で生徒が作成した教科書解説シート画像データの保存やパフォーマンステストの動画データの保存に活用する。
Forms（アンケート・質問回答機能）	教科書内容理解に関する問題の宿題として活用する。また、各問題の正答率を把握することで授業改善に活用する。
PowerPoint	文法事項解説の視覚教材提示に活用する。
Class Notebook (学生ノートブックや共同作業スペース等で構成される授業ごとのノートブック機能)	1. パフォーマンス・テストの評価や動画データ、原稿データ等蓄積のためのポートフォリオとして活用する。 2. イマーシブリーダー（文字読み上げ機能）をパフォーマンス・テスト練習に活用する。

3 実態調査

検証授業実施前に生徒の英語に関する興味・関心や発信力の実態を調査するため、浦添高等学校 2 年 3 組 25 名を対象にアンケートとパフォーマンス・テスト（1 分間スピーチ）を行った。

(1) アンケート調査の結果

対象クラス 25 名のアンケートにおいて「英語で一番得意な技能は何ですか？」という質問に対して「読むこと（48%）」「聞くこと（20%）」とインプットに関する技能を挙げた生徒が 68% と多数を占めており、「英語で一番苦手な技能は何ですか？」という質問に対しては「話すこと（44%）」「書くこと（40%）」とアウトプットに関する技能を挙げる生徒が 84% と多い。この結果から、文部科学省が行った英語力調査と同様、本校においても「話すこと」「書くこと」を苦手としている生徒が多いことが分かった。また、「これから最も伸ばしたい技能は何ですか？」という質問に対して「話すこと（60%）」「書くこと（20%）」を挙げている生徒が合わせて 80% を占めており、発信力を高めることが課題であると考える生徒が多いことが分かる。

パフォーマンス・テストに関する実態調査では昨年度授業でスピーチやプレゼンテーションを行ったと 84% の生徒が答えているが、その回数は「1 回（81%）」「2 回（14%）」「3 回（5%）」と私自身のこれまでの取組と同様、パフォーマンス・テストの継続性に課題があると推察できる。さらに、「スピーチやプレゼンテーションの評価をどのように行いましたか？（複数回答可）」という質問に対しては「教師からの評価（67%）」「相互評価（76%）」は高い割合で実施されているが、「自己評価」を行った生徒は 10% と少ない。自己評価は森本やズビザレタがポートフォリオにおいて重要視する「省察」を行う上で有効な手法であり、自己評価を行った生徒の割合が少ないという実態は私のこれまでの実践事例と共通した課題であると考える。

(2) 第1回パフォーマンス・テストの結果

検証授業を実施する前に生徒の発信力を把握するため、5月末に1回目のパフォーマンス・テストを1分間スピーチの形式で行った。トピックは Lesson の巻末に掲載されているコミュニケーション活動の話題として取り上げられていた「自分が一生懸命頑張っていること（もししくはこれから頑張りたいこと）」とした。生徒には事前にループリック表を開示し、評価規準の確認を行ってからスピーチ動画の撮影を行った。その後、図3のループリック表を使用して教師からの評価と自己評価を行った。パフォーマンス・テストの平均点は20点満点中12.8点と6割を超えており、最高点は19点で、得点率8割を超える生徒も25名中4名いた。一方で、8点～9点と一桁台の生徒も4名おり、生徒間で発信力に差が見られる結果となった。特に、Lessonで学んだ文法事項や新出語句の使用に関する「文法・語彙」の項目においては、図4にあるように平均点が

5点満点中2.5点と「スピーチの技能」と並んで最も低く、最低点の1点に分類された生徒が13名と4つの観点の中で最も多かった。この結果から、授業で学んだ文法や語彙の知識を実際に活用できていない生徒が多いという現状が分かった。そのため、次回のスピーチに向けては自己評価を行わせることで課題を認識させ、教師からの評価ではその課題解決に向けた手立てを与えた。さらに、授業で学んだ内容を実際に英作文する小課題を各パートに設け、それらの課題を通してパフォーマンス・テストで既習事項が活用できるように取り組ませることとした。

ループリック表 (Lesson1 "I'm the strongest" スピーチ評価用) Topic: 自分が頑張っていること(頑張りたいこと)とその理由					
評価項目	5	4	3	2	1
文法・語彙	Lessonで学んだ文法や単語、熟語を5つ以上使用しており、用法の間違えがない。かつ、使用的な項目に1つ以上新出文法が含まれている。	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語を5つ以上使用しており、用法の誤りは1つ～2つしか見られない。	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語の使用は4つだが、用法の誤りがほとんどない。(1つ以下)	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語を5つ以上使用しているが、用法の誤りが3つある。	評価項目5～2に当てはまらないもの。
語彙数	60 wpm 以上	59～45 wpm	44～30 wpm	29～15 wpm	14～0 wpm
スピーチの技能	相手にはっきり聞こえる声で、内容を正確に表現し、聞き手とアイコンタクトをしてスピーチを行っている。	原稿を數回見ることはあるが、相手にはっきり聞き取れる声でスピーチを行っている。	原稿を頻繁に見ているが、相手にはっきり聞き取れる声でプレゼンテーションを行っている。	原稿を見ながらではあるが、相手にはっきり聞き取れる声でプレゼンテーションを行っている。	原稿を見ながらのスピーチで、声も聞き取りづらい。
内容	自分が一生懸命に頑張っていることが具体的に表現されており、なぜそれを頑張るのか理由も明確に述べられている。	自分が一生懸命に頑張っていることその理由が述べられており、内容も明確である。	自分が一生懸命に頑張っていることその理由が述べられておらず、どちらか一方の内容が明確でない。	自分が一生懸命に頑張っていることを明確に述べているが、理由の記述がない。	自分が一生懸命に頑張っていることを述べているが、内容が明確でない。

図3 第1回パフォーマンス・テストで使用したループリック表

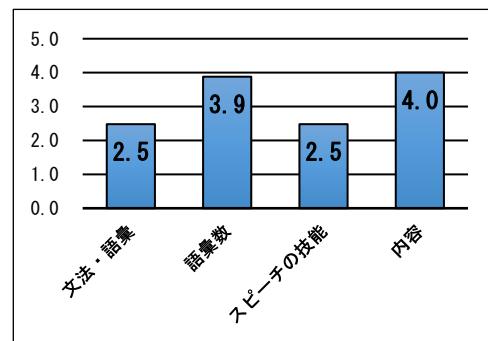


図4 第1回パフォーマンス・テスト

観点別平均点グラフ

III 指導の実際

1 単元名 Lesson 2 Tokyo's Seven-minute Miracle (LANDMARK II:啓林館)

- 2 単元目標
 - ・新幹線の清掃員が7分間で行うことについて理解する。
 - ・清掃員に対する高い評価の背景を理解する。
 - ・強調のための倒置、形式目的語の itについて理解する。

3 単元の具体的な評価規準

	①コミュニケーションへの関心・意欲・態度	②外国語表現の能力	③外国語理解の能力	④言語や文化についての知識・理解
規準	「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の言語活動に積極的に取り組んでいる。	①情報や考えなどについて、英語で話し合ったり意見の交換をしたりすることができる。 ②情報や考えなどについて、英語で簡潔に書くことができる。	①英語を聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。 ②英語を読んで、情報や考えなどを理解したり、概要や要点を捉えたりすることができる。	英語の仕組み、使われている言葉の意味や働きなどを理解しているとともに、言語の背景にある文化を理解している。

4 単元の指導計画（全 12 時間）L:Listening R:Reading S:Speaking W:Writing

時	学習活動	評価の観点				ICT 活用	Office365 機能活用
		①	②	③	④		
1	・導入 L/S ・新出単語意味確認、発音練習 L/S ・リスニング L ・グループワーク（解説作成）R/W	○			○	iPad、プロジェクト タ、	・OneDrive（生徒の作成し た解説シートの画像保存 に活用）
2	・Part1 内容理解 R/S ・音読練習 R/S ・振り返り W	○	○			iPad、プロジェク タ	・Forms（内容理解問題宿 題に活用）
3	・新出単語意味確認、発音練習 L/S ・リスニング L ・グループワーク（解説作成）R/W	○		○		iPad、プロジェク タ	・OneDrive（生徒の作成し た解説シートの画像保存 に活用）
4	・Part2 内容理解 R/S ・音読練習 R/S ・文法理解、英作文(強調のための倒置) L/W ・振り返り W	○	○	○		iPad、プロジェク タ	・Forms（内容理解問題宿 題に活用） ・PowerPoint（文法解説に 活用）
5	・新出単語意味確認、発音練習 L/S ・リスニング L ・グループワーク（解説作成）R/W	○		○		iPad、プロジェク タ	・OneDrive（生徒の作成し た解説シートの画像保存 に活用）
6	・Part3 内容理解 R/S ・音読練習 R/S ・文法理解、英作文(形式目的語の it) L/W ・振り返り W	○	○	○		iPad、プロジェク タ	・Forms（内容理解問題宿 題に活用） ・PowerPoint（文法解説に 活用）
7	・新出単語意味確認、発音練習 L/S ・リスニング L ・グループワーク（解説作成）R/W	○			○	iPad、プロジェク タ	・OneDrive（生徒の作成し た解説シートの画像保存 に活用）
8	・Part4 内容理解 R/S ・音読練習 R/S ・振り返り W	○	○	○		iPad、プロジェク タ	・Forms（内容理解問題宿 題に活用）
9	・前回のパフォーマンス・テスト相互評価 L/W ・前回のパフォーマンス・テストの振り返り L/R ・パフォーマンス・テスト原稿作成 W	○	○			PC、プロジェク タ、スクリーン	・Class Notebook（パフォ ーマンス・テスト動画デー タを振り返りに活用）
10	・パフォーマンス・テスト原稿作成 W ・パフォーマンス・テスト練習 L/S	○	○			PC、プロジェク タ、スクリーン	・Class Notebook（イメ シブリーダーを活用）
11 本 時	・パフォーマンス・テスト練習 L/S ・パフォーマンス・テスト実施 S ・自己評価 L/W	○	○			PC、プロジェク タ、スクリーン、 スマートフォン、 iPad	・Class Notebook（イメ シブリーダーを活用） ・Forms（授業の自己評価 に活用）
12	・パフォーマンス・テストフィードバック R ・自己評価のポートフォリオ作成 W ・スピーチ原稿訂正画像、スピーチ動画のポート フォリオ作成 ・パフォーマンス・テスト振り返り W	○		○		PC、プロジェク タ、スクリーン、 iPad	・Class Notebook（ポート フォリオ作成に活用）

5 本時の学習指導(11/12 時間)

(1) 本時の目標

- ①レッスンで学習した文法事項や新出単語・熟語等を活用しスピーチを作成することができる。
- ②スピーチの内容が聞き手に伝わるように工夫して発表することができる。

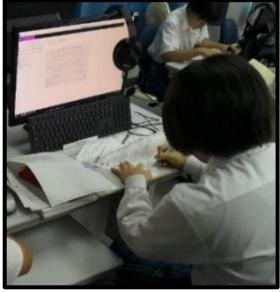
(2) 使用教具・I C T 機器

パソコン、プロジェクタ、スクリーン、iPad、スマートフォン（生徒所有のもの）

(3) 評価の観点（本時）

本時の評価の観点は別紙のループリック表を使用する。

(4) 本時の展開（11時間/12時間）

過程	学習活動	指導上の留意点	I C T 活用	評価の方法
導入 3分	1. 本文の内容に関するQ & A	・教師は活動前に生徒が単元の内容とスピーチの内容を関連付けられるよう働きかけをする。	P C、プロジェクタ、スクリーン	活動の観察（積極的に発言しているか）
展開 42分	1. ポートフォリオを活用した振り返り（12分） ①ポートフォリオに蓄積した動画データや評価データを活用して前回のパフォーマンス・テストの振り返りを行う。 ②ループリック表を活用して今回の目標を立てる。 2. パフォーマンス・テスト（1分間スピーチ）練習(20分) Office 365のClass Notebookのイマーシブリーダーを活用して各自スピーチの練習をする。 3. パフォーマンス・テスト実施(10分) ペアでお互いのスピーチ動画を撮影し、Airdrop機能を使って動画を教師のiPadに送信する。	・教師は生徒に対してただ動画を見るだけでなく、前回の課題を各自で把握するよう働きかけ、その克服に向けた手立てと目標を立てさせる。 ・教師は生徒が各自で練習を進められているか把握し、操作や練習で困っている生徒がいた際は机間指導を行う。 ・教師は生徒がペア同士で動画撮影ができているか机間指導する。	P C、プロジェクタ P C、ヘッドフォン スマートフォン、iPad	活動の観察（積極的に参加しているか） 活動の観察（積極的に参加しているか） 活動の観察（積極的に参加しているか） 別紙ループリック表を使用する（評価は動画を見て後日行う）
	  	ポートフォリオを活用して振り返りをする生徒の様子 イマーシブリーダーを利用して練習する生徒の様子 スマートフォンを利用してスピーチ動画を撮影しあう生徒の様子		
まとめ 5分	1. Formsを利用した自己評価 Formsを利用して自己評価を行う。	・Formsで自己評価を行い、送信するように指導する。	P C	Formsの回答状況の確認

IV 仮説の検証

本研究では研究仮説に基づき、検証授業においてパフォーマンス・テストの評価や動画、原稿などのClass Notebook上に蓄積した「学びのデータ」を活用して生徒自ら課題を振り返り、発信力の強化に向けて取り組ませた。これらの実践により生徒の「話す力」や「書く力」といった発信力が強化されたか、教師はパフォーマンス・テストを効率的かつ効果的に行えたかを、次の3つの方法を用いて検証する。

1 第1回パフォーマンス・テストと第2回パフォーマンス・テストの結果比較と分析

検証授業実施後の6月末に2回目のパフォーマンス・テストを1分間スピーチの形式で行った。トピックは前回と同様Lessonの巻末に掲載されていた「日本や沖縄が世界に誇れるものとその理由」とし、図5のループリック表を用いて評価した。第2回パフォーマンス・テストまでの検証授業においては、第1回パフォーマンス・テストで特に平均点の低かった「文法・語彙」の課題解決に取り組ませた。Lessonの新出文法事項解説後に文法事項を使用してスピーチの題材に関連した内容の英作文を行った。また、新出語句等の意味や使い方などの説明をする自作の「解説シート」を作成し、語彙の定着を図った。さらに、第2回パフォーマンス・テスト前にはClass Notebookにポートフォリオとして蓄積した「学びのデータ」を活用した振り返り活動も行った。その結果、図6にあるように「文法・語彙」の平均点は2.5点から4.3点（5点満点）に1.8点上昇した。また、回は25名中13名の生徒が「文法・語彙」で最低点の1点に分類されたが、今回はその人数は2名に減少した。この結果から、授業における活動とパフォーマンス・テストを関連付けて行うことで語彙の定着や文法事項の習得が図られるとともに、ポートフォリオを活用して自身の課題を振り返ることによって、生徒の「書く力」が高まったことが考えられる。

次に、「文法・語彙」の観点と同様に第1回パフォーマンス・テストで平均点が2.5点と低かった「スピーチの技能」の課題解決に向けてClass Notebookに蓄積したスピーチ動画データとClass Notebookの機能の一つであるイマーシブリーダー（文字読み上げ機能）を活用した。第2回パフォーマンス・テストの実施前にペアでお互いのパフォーマンス・テストの動画を見て良かった所や改善点を指摘しあい、その指摘を踏まえて再度自身のパフォーマンス・テスト動画を見て課題を再認識させた。その後、今回のパフォーマンス・テストにおける観点別の目標点数と克服したい課題を自ら考えて設定し、イマーシブリーダーを活用して各自でパフォーマンス・テストに向けて主体的に練習を行った。その結果、図6にあるように「スピーチの技能」に関しても平均点が2.5点から3.2点に0.7点上昇した。これは上述した方法でOffice 365を活用することによって、生徒の「話す力」が徐々に向上した成果であると考える。

ループリック表 (Lesson2 "Tokyo's Seven-minute miracle" スピーチ評価用) Topic: 日本や沖縄が世界に誇れるものとその理由					
評価項目	5	4	3	2	1
文法・語彙	Lessonで学んだ文法や単語、熟語を5つ以上使用しており、用法の間違えがない。かつ、使用した項目に1つ以上新出文法が含まれている。	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語を5つ以上使用しており、用法の誤りは1つ～2つしか見られない。	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語の使用は4つだが、用法の誤りがほとんどない。(1つ以下)	Lessonで学んだ文法項目や単語、熟語を5つ以上使用しているが、用法の誤りが3つある。	評価項目5～2に当てはまらないもの。
語彙数	80 wpm 以上	59～45 wpm	44～30wpm	29～15wpm	14～0wpm
スピーチの技能	相手にはっきり聞こえる声で、内容を補記し、聞き手とアイコンタクトをしてスピーチを行っている。	原稿を数回見ることはあるが、相手にはっきり聞き取れる声でスピーチを行っている。	原稿を頻繁に見てしまはが、相手にはっきり聞き取れる声でスピーチを行っている。	原稿を見ながらではあるが、相手にはっきり聞こえる声でプレゼンテーションを行っている。	原稿を見ながらのスピーチで、声も聞き取りづらい。
内容	日本や沖縄が世界に誇れることが具体的に表現され、その理由がエビソードを交えて述べられている。	日本や沖縄が世界に誇れることその理由が述べられており、内容も明確である。	日本や沖縄が世界に誇れることその理由が述べられており、内容も明確である。	日本や沖縄が世界に誇れること明確に述べているが、理由の記述がない。	日本や沖縄が世界に誇れることを述べているが、内容が明確でない。

図5 第2回パフォーマンス・テストで使用したループリック表

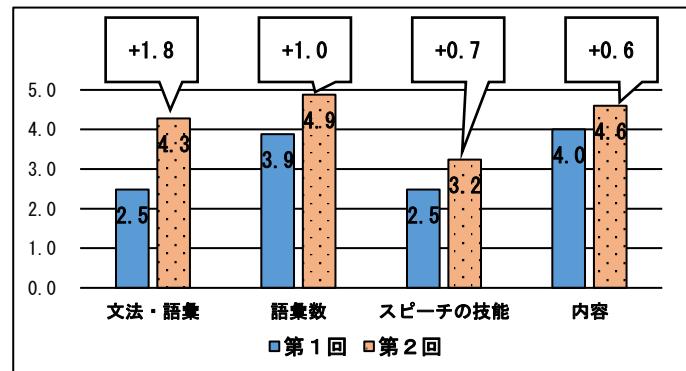


図6 第1回、第2回パフォーマンス・テスト
観点別平均点比較グラフ（各5点満点）

第1回と第2回の結果を総合的に見ても、クラス全体の平均点は12.8点から17.0点と4.2点上昇した。第1回では一人もいなかった満点の生徒も5名おり、クラス25名中23名の得点が上昇する結果となった。また、得点に変化のなかった図7の生徒Aと生徒Bについても、ループリック評価では得点の変化はなかったものの、生徒Aは原稿を見る回数が第1回と比べて減少していた。生徒Bも使用語数の増加や新出文法事項が正しく使えるようになるなどの変容が見られ、生徒Aと同様課題解決に取り組んだ成果が見られた。

また、第1回で平均点以下だった下位層の生徒の得点は平均して6.0点上昇しており、クラス全体の平均点上昇(4.2点)を超える伸びを見せた。この結果から、Office 365を活用したポートフォリオ活動は英語が得意な生徒だけでなく、発信力に課題を抱える生徒にとっても課題解決の有効な手立てとなると考察することができる。第1回と第2回パフォーマンス・テストでトピックは異なるが、評価には同じループリック表を使用しており、この結果には信頼性があるものと考える。従って、パフォーマンス・テストの平均点推移や個人別得点推移という観点に限れば、Office 365を活用したポートフォリオ活動の実践により、生徒の発信力が向上したと言える。

2 検証授業前後のアンケート結果と考察

検証授業後のアンケートでは図8にあるように「スピーチやプレゼンテーションに取り組むことで話す力や書く力は伸びると思いますか?」という質問に対して「そう思う(68%)」、「どちらかと言えばそう思う(28%)」と肯定的に答えた生徒は合わせて96%と多く、生徒がパフォーマンス・テストでスピーチやプレゼンテーションに取り組むことで発信力を伸ばすことができると実感していることが分かった。また、「自分の学びの成果(動画や原稿、評価など)をポートフォリオにまとめることを継続すればスピーチは上達すると思いますか?」という質問に対しては「そう思う(76%)」、「どちらかと言えばそう思う(24%)」と生徒全員が肯定的に答えており、表2の生徒の感想と合わせて考察すると、生徒はOffice 365を活用したポートフォリオ活動が発信力強化のための有効な手立てであると感じていると言える。

表2 Office 365を活用したポートフォリオ活動を実践した生徒の感想

●前より文法ができるたと思うし長く書けた。できたと思う。Office 365の使い方がわかつってきた! ●自分の成長が見て取れて、モチベのアップにつながった。 ●1回目の時よりもいいスピーチにするように頑張れた。 文法とか単語を原稿に入ることで復習になってよかったです。 ●今回のスピーチを通して、英文をつくったり、話したりして、とてもいい勉強になったと思います。自分で評価することで、自分の良かった点と改善すべき点を知るので、いいなと思いました。

加えて、アクティブ・ラーニングの視点からの「①主体的な学び」、「②対話的な学び」、「③深い学び」に関する3つの質問に対する答えを検証授業の前後で比較すると、図9にあるように「①主体的な学び」と「③深い学び」に関する質問に肯定的に答える生徒の割合が増えている。「②対話的な学び」に関する質問に対しても、肯定的に答えた生徒の割合は合わせて88%と検証授業前後で

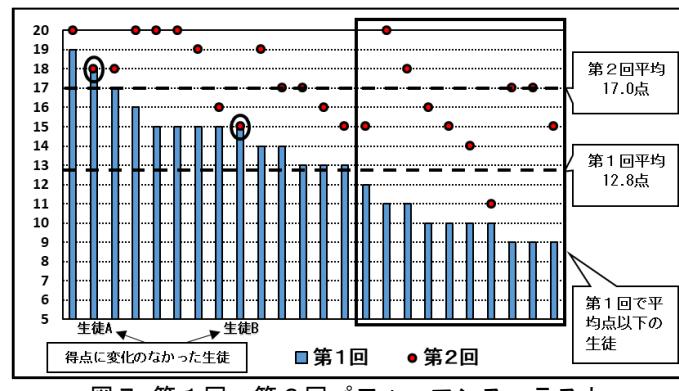


図7 第1回、第2回パフォーマンス・テスト

個人別得点比較グラフ(第1回得点順)

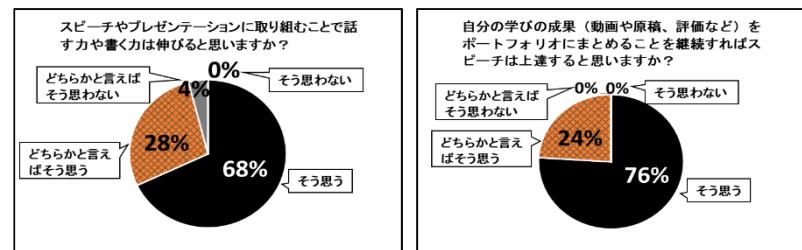


図8 検証授業後のアンケート結果①

数値の変化はないが、「そう思う」と答えた生徒の割合は32%から44%に増えている。また、「そう思わない」と答えた生徒が検証授業前には4%（1名）いたが、検証授業後には0%になっている。これらのアンケート結果から、Office 365を活用したポートフォリオ活動は発信力強化という課題を解決する上で必要不可欠な「学びに向かう力」の育成にも役立つと言え、今後もポートフォリオ活動を日々の授業実践で継続して行い、生徒の発信力強化に向けて取り組みたい。

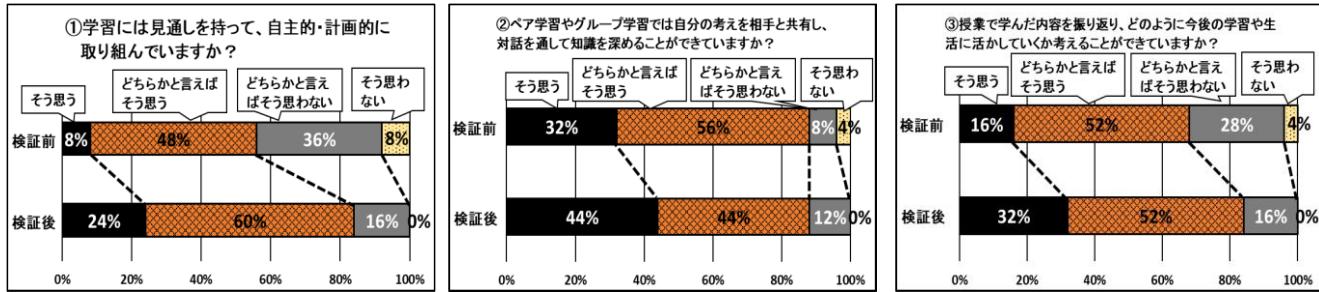


図9 検証授業後のアンケート結果②（アクティブ・ラーニングの視点からの質問に対する回答）

3 これまでのパフォーマンス・テスト実践と本研究における実践の比較・考察

私がこれまでに行ってきたパフォーマンス・テストでは、テストの実施だけで約3時間の授業時数を費やしていた（表3）。しかしながら、本研究ではパフォーマンス・テストの実施にかかった時間はペアで動画を撮影する10分間のみである。テストの評価についても動画データを活用したため、教師は空き時間や生徒がポートフォリオを作成している間に余裕を持って評価を行うことができた。加えて、パフォーマンス・テストの実施時間を短縮したことでの「学びの振り返り」やポートフォリオ作成に取り組み、自身の成長や課題を振り返ることができた。以上の点を鑑みて、これまで私自身が行ってきたパフォーマンス・テストに比べて効率的かつ効果的にテストを実施することができたと考える。

表3 パフォーマンス・テスト実践内容の比較

時	本研究における パフォーマンス・テスト実践	これまでの パフォーマンス・テスト実践例
1	・前回のパフォーマンス・テスト相互評価 ・前回のパフォーマンス・テストの振り返り ・パフォーマンス・テスト原稿作成	・パフォーマンス・テスト原稿作成 ・パフォーマンス・テスト練習
2	・パフォーマンス・テスト原稿作成 ・パフォーマンス・テスト練習	・パフォーマンス・テスト実施（10名程度）
3	・パフォーマンス・テスト練習 ・パフォーマンス・テスト実施（10分） ・自己評価	・パフォーマンス・テスト実施（10名程度）
4	・パフォーマンス・テストフィードバック ・ポートフォリオ作成 ・パフォーマンス・テスト振り返り	・パフォーマンス・テスト実施（10名程度） ※結果の返却（フィードバック）は次の時間の冒頭10分程度で行っていた。

V 成果と課題

1 成果

- (1) Office 365を活用したポートフォリオ活動を実践することでパフォーマンス・テストの成績が上昇し、発信力の強化に繋がった。
- (2) Office 365やループリック表を活用し、自ら課題解決に取り組む「学びに向かう力」を育成することができた。
- (3) Office 365やICT機器、ループリック表を活用することで教師は効率的かつ効果的にパフォーマンス・テストを行うことができた。

2 課題

- (1) 本研究ではクラス全員で同じ形式のポートフォリオを作成したが、今後は生徒自身で工夫してポートフォリオを作成し、課題解決に向けて主体的に取り組んだり、学びの成果を今後の生活で活用したりできるよう、指導方法や活動内容について検討・改善する必要がある。
- (2) 発信力強化に向けて、パフォーマンス・テストの内容検討や、生徒による評価を成績に取り入れるなど評価方法について検討・改善が必要である。
- (3) パフォーマンス・テストを教科全体で行えるようにループリック表等の統一した評価規準について英語科全体で検討、改善することが必要である。

〈参考文献〉

- 清田洋一編 2017 『英語学習とポートフォリオの理論と実践 自立した学習者をめざして』 くろしお出版
- 田中博之著 2017 『実践事例でわかるアクティブ・ラーニングの学習評価』 学陽書房
- 西岡加名恵他編著 2017 『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる—学ぶ力を育てる新たな授業とカリキュラム』 学事出版
- 主体的学び研究所編 2015 『主体的学び3号 特集アクティブラーニングとポートフォリオ』 主体的学び研究所
- 佐藤一嘉編著 2014 『ワーク&評価表ですぐに使える! 英語授業を変えるパフォーマンス・テスト 高校』 明治図書
- 當作靖彦／中野佳代子著 2013 『外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』 公益財団法人国際文化フォーラム（T J F）
- ダイアン・ハート著 2012 『パフォーマンス評価入門 「真正の評価」論からの提案』 ミネルヴァ書房

〈参考URL〉

- スタディサプリ 2018 『高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」の概要・活用の意義』
<https://www.youtube.com/watch?v=bAHvJMlrl5s> (2018年8月最終アクセス)
- 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領』 (2018年8月最終アクセス)
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf
- 文部科学省 2018 『高等学校学習指導要領解説』 (2018年8月最終アクセス)
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1407074.htm
- 文部科学省 2017 『平成29年度英語教育改善のための英語力調査 事業報告』 (最終アクセス: 2018年8月)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_03_1.pdf
- 文部科学省 2017 『平成29年度英語力調査結果(中学3年生・高校3年生)の概要』 (最終アクセス: 2018年8月)
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/__icsFiles/afieldfile/2018/04/06/1403470_01_1.pdf
- Japan Office Official Blog 2016 『OneNote Class Notebook を e ポートフォリオとして活用』 (2018年8月最終アクセス) https://blogs.technet.microsoft.com/microsoft_office/_/2016/05/10/onenote-class-notebook-as-an-e-portfolio/
- 文部科学省 2016 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)(中教審第197号)』 (最終アクセス: 2018年8月) http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
- 森本康彦 2013 『教育分野におけるeポートフォリオとは』 (2018年8月最終アクセス)
<http://draco.u-gakugei.ac.jp/eportfolio/>
- 文部科学省 2013 『「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」について』 (2018年8月最終アクセス)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/__icsFiles/afieldfile/2013/12/17/1342458_01_1.pdf
- 日本私立大学協会 2010 『ラーニング・ポートフォリオ活用授業』 (2018年8月最終アクセス)
https://www.shidaikyo.or.jp/newspaper/online/2395/3_3.html
- 森本康彦 2010 『失敗しない効果的なeポートフォリオの活用法～eポートフォリオシステムの導入に際して～』 (2018年8月最終アクセス) http://www.ctc-g.co.jp/~caua/event/forum2010/pdf/forum2010_morimoto.pdf
- 英語4技能試験情報サイト 『CEFRについて』 (2018年8月最終アクセス)
<http://4skills.jp/qualification/cefr.html>
- Microsoft 『OneNote for teachers』 (2018年8月最終アクセス)
<http://www.onenoteineducation.com/en-US/teachers/>